



立教百七十八年 学生担当者大会における表統領中田善亮先生で講話 十一月二十五日・第二食堂

皆様方には、学担のみならず教会や地域においていろいろなお役を持つ上に、この学生担当委員会の役目を担ってくださっていることだと思います。誠に苦勞様でございます。深く御礼を申し上げます。

「教祖百三十年祭活動」。この言葉を言い続けて三年以上になりますけれども、三年千日の仕切りの活動も仕上げの年と言われて、その年もあとひと月を残すばかりであります。年祭当日を間近に控えまして、今年を振り返れば、仕上げの年として一年目、二年目と積み重ねてきたさまざまな動きの成果がいろいろな喜びの形となって表れてきていると思います。今回の年祭活動は、「おたすけ」一本で申し合せてつとめて参りました。真柱様は「すべてのよふ、よくがおたすけをできるように」と仰せくださいます。年祭活動の仕切りの終わりまであと二ヶ月であります。一人残らずよふ、よくと名前の付く人がおたすけができるようにということが、なかなか難しいということは、教会を預かる者としては全員共通の思いであります。しかし真柱様が、そんなことは重々ご承知の上で「よふ、よくすべて」と仰るその思召を私たちはしっかりと受け止めさせていただ

お知らせ

一月例会
1月例会はございません。尚、資料は1月25日から学生担当委員会事務局にて配付させていただきます。

報告

十一月例会

11月例会は、11月25日に開催しました、「学生担当者大会」前の諸連絡に代えさせていただきます。

各地の動き

【教区学生層育成者講習会】			
・長野	11月1日	教務支庁	40名
吉川委員長出向			
【直属学生層育成者講習会】			
・川之江	11月10日	大教会	150名
辻委員長出向			
・筑紫	11月22日	大教会	300名
松村副委員長出向			
・甲府	11月22日	大教会	80名
泉委員出向			

業務記録

《立教178年11月16日～12月15日》			
11月16日	委員会		
学修高校の部研究室会議			
屋外プログラムチーム会議			
まなびば研究室会議			
17日	委員会 学生連絡会		
ビデオチーム会議			
担当者活動部部会			
出版部部会			
18日	事務局連絡会		

・城山	11月22日	大教会	90名	吉川委員長出向
・鎮西	11月22日	大教会	130名	中島委員出向
・池田	11月23日	大教会	120名	松村副委員長出向
・佐野原	11月23日	大教会	120名	吉川委員長出向
・名古屋	11月23日	大教会	150名	飯降委員出向
・淀	11月23日	分教会	80名	葛西委員出向
・宇仁	11月24日	大教会	80名	森井委員出向

て、それに近づくように一人でも多くのよう、よく「おたすけ」という意識を持って日々の行いを神様の教えに照らして、教祖のひながたに照らして歩んでいただくようになってもらえるよう声をかけ続けていかなければならないと思います。

今年は、教会ごとに声を合わせて別席団参を組んで頑張ってくださいという成果が出ておりまして、特にそれは初席者の上に表れてきております。十月いっぱいまでの集計を見ますと一万八千九百三十七名の初席者でありました。これは、最近のお道の中では突出した数字なのです。我々一つひとつの教会で考えますと一万いくらか言われてもピンときませんけれども、全体を比べますと年間でこの初席者が一万八千を超えているというのは、もうここ十年はほとんどないのです。最近一番多かったのは教祖百二十年祭の年が二万二千あまりで、今年は十一月、十二月も過ぎればおそらくこれを同じくらいを超えるのではないかと楽しみにしておるところであります。そのもう一つ十年前を見ても二万二千を超える数字まで初席者が出ている年は少ないのです。百年祭以降、いろいろな場面でこういう数字というものを見ると下り坂ばかりで、どちらかというと「うーん」というような険しい顔をしなければならない場面がたくさんありましたけれども、今年はそういう意味では非常にありがたい。当然これは、一つひとつの教会についての積み重ねですから、大いにそういった喜びを得て

おられる教会があるのだと思いますと尚更ありがたく思います。

この度の年祭活動は、こうして、このような形でここまで参りました。思い起こせば教祖百年祭後の、前真柱様の思召、そしてその後、我々をお導きくださる現真柱様の思召は一貫されています。当時のことをご存じの方は覚えておられると思います。「これから言われなくても自分たちから仕切って、自分たちからつとめられるように成人しなければならない」というようなお話を度々お仕込みいただきました。しかし、それが曲がりなりにもその方向性を持って、やっとこの度の年祭活動は進められてきたのではないかというふうに、少しは喜びいただける、ご安心いただけたのかなと思います。まだ二ヶ月を残すところでごこんなことを言うのは早いのですけれども、この勢いであと二ヶ月をしつかり通り切らせていただきたいと思っております。

さて、この学生担当委員会は、もちろん学生さんを担当する委員会ということでして、学生さんの中には学生会というものが組織されるわけがあります。学生という立場は、年齢的には日本の法律でいえばちょうど成人である二十歳をまたいでいるわけですが、その性質上、学業やスポーツというものを通して、あるいはそういった研究というようなものを通して、知識を蓄え、あるいは経験を重ね、そして、いわゆる将来に向けての人格を形成する途上にある立場といえるのではないかと思うのです。そして同時

に、信仰的に申せば、親から伝えていただいた信仰を本人自身の信仰へと切り替えていく重要な年頃でもあると思います。学生の年齢で信仰初代という人は自分の意思で信仰についたわけですから、きっかけはともかく自分の意思でお道に触れようとしたわけですので、これは確かであります。ところが、親の信仰から自分の信仰へと親から信仰を受け継ぐ立場の者の方が、この年頃の中には遙かに多い割合だと思います。

一方、教えには十五歳という仕切りを設けてくださっているのでありまして、それを元に少年会という十五歳までの活動と、そして、それを超えた活動が明確に区分されているわけです。十五歳までは、例えば身上や事情をお見せいただければ、親の心得違いを子どもに表してお知らせくださると。これは親にとっては非常に厳しい話であります。しかし、子どもを持てば当然親として考えることは、その言葉を真に受けて、我が子が十五歳を超えれば「お前の身上や事情は俺には関係ないのだ」と、「今までは俺の責任だけれども、もう俺には関係ない。お前の責任だからしっかりせい」と突き放す親はいないのであって、おそらく子どもが三十歳になろうが四十歳になろうが、孫ができようが、子どもが身上で苦しめば、自分に信仰があればやはり親のさんげだと思ふのが親の心だと思います。ならば、この十五歳で意識をしなければならぬのは、むしろ子どもの側であります。そして、それを教

える親の立場であります。子どもは十五歳までは親の責任にして良いわけなのです。十五歳までもいろいろです。赤ん坊もいれば十四歳、十五歳もいるわけで、一概に言うわけには参りませんが、しかし、親のせいにして良いわけなのです。親に対して「お前がこんな通り方をしているから、俺がこんな目に遭うんだ」と言われたって致し方ない。その通りなのです。言うか言うまいかはともかく、そういうことなのです。

しかし、十五歳を超えれば「そうじゃない」ということを私たちは親として子どもに教えるなければならない。これは私は縦の伝道ということを考える時に非常に大切な観点だと思います。つまり、それはその身上や事情が誰のせいとかいうことだけではなくて、信仰ということ、物事がなってくる、起こってくる、見ること聞くことを自分に対して親神様がお知らせくださっていることと受け止めるという、つまり信仰の思案の仕方です。を、や、の思召の受け止め方ということを自分自身の信仰として、信念として腹に持てるかどうかということが大事であって、それを切り替える必要はない。だから、この十五歳を超える年代というのは、私は非常に大事な時期だと思います。それが十六歳なのか、十七歳なのか、二十歳で気付くのか、二十五歳で気付くのか。それは結構です。しかし、どこかで親の信仰から自分自身の信仰に切り替えるということをしなければ、なかなか自分の腹の据わっ

た信仰というものは持てない。逆に申せば、それが切り替えられないままにずっと行くならば、五十歳になろうが六十歳になろうが七十歳になろうが親が出直そうが、親の信仰のまま自分の思案は持てず、常に何かの責任にしながら通る信仰しか持てないと、極端に申せばそういうようなことになりかねない。ですから、この学生会の彼らの年代というものは、もちろんこれは婦人会も青年会も同じであります。若い世代のそういった切り替える行いというのは大事だということを強く思います。

いつもこの話をどこでもするのですが、言葉は乱暴な表現ですけども、それを入信と言っています。私たちここにおられる皆さん方もほとんどが親からの信仰だと思います。私たちはいつ入信したのか。入信というのは、先ほども申しました初代の人ははつきりしているのです。いつということも自分でいうことははつきりしている。だから、初代の人の信仰が強いというのは私はその部分が大きいと思います。代を重ねれば、代を重ねるほど徳を積んで良くなっていくはずなのにその方が信仰が弱いようなことを言われるのは何故かという、自分自身がいつ信仰を始めたのか、いつ自分の信仰で思案できるようになったのかははつきりしていないからです。例えば、幼い頃に大教会の少年会行事に行くのは、親に連れられて行くのです。自分の意思では行かない。親が連れて行く。そこから始まっていつ自分の意思で

教会へ足を運ぶようになったのか。そういったことを自分で意識して、今、確かに私は親に言われて行くのではなく、自分の意思で行っているのだということを思えば、それが自分の入信だと。言葉の使い方の善し悪しはともかく、分かりやすい表現だと思うのでそう言うのですけれども、自分の入信の時をはつきり持つ。それより以前は、親の責任でもいいのです。だけど、それより以降は、振り返ってでも「あの時、この時、親の責任にしてきたな」ということがあるならば、考え方を改めて次へ進んでいくということが、いわゆる信念のある信仰というものに繋がっていくと思います。そしてこれが、ひいては今度は自分の子どもに信仰を伝える時に、子どもに響くか響かないか。自分が親の信仰をそのまま責任もなしに、言われるがままに右から左に言っていて、子どもにそれが響くかどうか。私は伝わるかもしれないけども響きはないのではないかと思うのです。やっぱり自分の信念で子どもに伝えることによって初めて子どもに響くということが生まれてくるのではないかと思います。これは孫に対してもひ孫に対して、代々道を繋いでいく、つまり縦の伝道ということはそういうことをなしにはありえないと思いますし、もし、縦の伝道が弱いと思う場面があるならば、その辺りのことをまず振り返ってみることが必要な作業ではないかと思います。

学生担当委員会の現在の活動方針には「おたすけの喜びを学生

に！」、そして、「あ、ら、き、と、う、り、よ、う、み、ち、の、だ、い、と、して共、に育、と、う」という副題が付いていると聞いております。「あ、ら、き、と、う、り、よ、う」とか「み、ち、の、だ、い」というのは、申すまでもなく婦人会、青年会の代名詞のような言葉であります。学生担当委員会の方針にこの言葉が入るということは、単純に私は非常にありがたいと思います。やっとここが重なったのかというような意識が、そのありがたいという思いの根幹にあるわけです。今、お道の教勢は先ほども申しましたように、今年初席者が増えたご守護はいただきましたが、それでこれから先も安泰で右肩上がりदैいくというふうにはさらさら思いません。しかしそこは勢いをもつて、また次の展開を得ていかなければならないところでありますが、いずれにいたしましても、やはり順風満帆な教勢の状況ということを誰もが思うにはまだまだ難しい状況だということはあきらかです。

そんな中で、いつも私は「オール天理」という言葉を用いるのですが、各会であつたり、あるいは年齢を超えて性別を超えて、あるいはいろいろな役目の上から部門部門があつてそれが縦割りになっていたりとか、あるいは縦の系統と横の地域活動とかいろいろなところで、便宜上分けてきたものが、ちよつと邪魔になつてきているような場面が目立つ。それは皆さんもよくよくお分かりのことだと思ひます。そのところを、とにかく「どこがど

う、ここがこう」ということではなくて、全部もう一丸になつて前に進んで行かなければ「どこがどこが」なんて言っていて、今申しましたようにそれでそれぞれが成り立つような状況ではないのです。とにかく「オール天理」でスクラムを組んで、どこかどこかが縦割りになつて隙間ができるのなら、誰かがその隙間を埋めなければならぬ。「俺いらんからお前やれ。俺いろいろ言われたくない」と言う人がいても「じゃあ俺がやる」と誰かが言わなければ「オール天理」にはならない。それを意のある者から買つて出て、とにかく今は前に進んで行こうという時期だと思うのです。それが今回の年祭活動には、真柱様がお示しくださる論達第三号の「おたすけ」という指針によって一つの成果をお見せいただいているのではないかと。これも非常にありがたいことだと思ひせていただいております。

そんな「オール天理」という意識の中で、この学生担当委員会の今の方針は非常に嬉しい表現だと思ひております。しかし、それは申すもののやはり学生担当委員会、それも学生会ではなく担当委員会側の方針でありますから、学生たちにとってはそんなこと以前に、あるいは平行して、やはり自分自身の信念で信仰するということを自覚する、自覚できるように私は進めていっていただきたいと思うのです。そういうことがなければ、結局はこれも昔からの学生会の悩みであります、学生会が終われば次へ続かな

いという部分、ここの解決に繋がらないと思います。楽しい楽しい学生会活動が終われば終わり、婦人会や青年会に繋がっていくことが難しいという現状は、やはりその根幹のところを見なければ、何かこう小手先という言い方が悪いですけども、手段やあるいは方法によって進めていっても、その個々の場面では良いかもしれないけれども根本的な解決にはなかなかないという現状だと思いますので、とにかく大事なこの学生会、学生さんたちの年代にそういったことを是非とも声かけしていただきたいということは、これは私のお願いであります。

話は少し変わりますが、来年の教祖百三十年祭、一月二十六日で仕切りは終わりを迎えるわけであります。教会長は真柱様から一月の月末にそれぞれ御招宴をいただいて、そしてお劳いをいただくのです。つまり、年祭活動は一つの仕切りを迎えます。しかしながら、年祭活動が終わったからといって私たちの信仰活動が終わるわけではありませんので、場面が変わる、こういうことでありますが、場面が変わるからといってまったく全てが一からやり直すのではなくて、当然昨日の続きの今日なのです。そのことを考え合わせていかなければなりません。「教祖百三十年祭 学生おちばがえり大会」。これは三月二十八日、つまり一月二十六日より後にあります。しかしながら、学生さんたちの立場から申せば、一月二十六日は平日であります。また、学校によっては試験

とかそういういろいろな時期でもあろうかと思えます。なかなかそこに合わせておちば、帰りをするということは難しいというのが学生さん一般の捉え方であろうし、我々もそういうふうに捉えております。帰れる人には是非帰ってもらいたいということは、もちろん声かけをしていただきたいと思えますし帰ってもらいたいと思います。しかし、その上に三月二十八日。ここに学生がおちばへ集まろうということは、私たちの信仰活動が昨日の続きの今日であるように、例えば今年初席者をこれだけご守護いただいた。初席者は初席で終わってはならなのであって、これはおさづけを頂戴するための第一歩の初席ですから、そこから中席を重ね、そしておさづけを頂戴していただいて、おさづけを取り次げる人になってももらいたい。つまり、おたすけ人を目指してほしいと思えますし、そのためには、やはり教会のおつとめに繋がる、あるいは、おつとめ奉仕者という立場でつとめてくださるようなところにまで丹精し、更には、次にはその人が新しい人を連れて別席場へ向かえるようなところを目指すのが私たちの有り様だと思いますから、初席者が多かった年があるならば、それを次に繋げていくということを考えていかなければなりません。同じように、三月二十八日に学生さんたちがおちばへ集合するということは非常にありがたいことですし、なんら年祭活動に反するとか枠がずれているとか、そんなことは私は思いません。非常に結構な設定

だと思えます。

大事なことは、そこに大動員を図られるということです。

万人という声を聞いておりますけれども、万人というのは万人なのです。当たり前ですけれども、九千九百九十九人は一万人とは言わないのです。当然のことながらそれでは届かない。しかし、九千九百九十九人いけば「おしかったな」と、こういう声が出て参ります。それが出れば九千九百九十人であっても「おしかったな」という声になってくる。だんだん、だんだん、ちょっとずつ数字を下げていけば全部「おしかった」になってしまいうのです。そして、振り返れば十年前は九千何人、二十年前は八千何人だったことを思えば、今回はなんとしても一万人を達成していただきたい。達成するご守護を頂戴できるような動きを展開できるように、是非学生さんたちを鼓舞していただきたいと思うのです。そのところは厳しいことを申すようですが、やっぱりまけるわけにはいかん。「まける」というのは「一人少なくとも九千九百九十九人でまけたか」という「まけるわけにはいかん」ということなのです。それなら目標の段階から九千九百九十九人の心定めにすればいいわけです。そうではなく一万人にしたのだから、つまり教会で「今年はようぼく二人、心定めします」と言っ一人しかできなかった。同じ一人足りないのです。二人のうちの一人が足りなからうが、一万人のうち一人が足りなからうが、

やはり足りないという、神様とのお約束に足りないということです。それを私は厳しいようですけれども学生さんたちに教えていただきたいと思えます。それは心定めということ、神様に相対する心構えということ、そういうことを伝えることに他ならないと思えますから。それぞれ教会や地域で目標を持つておられると思えます。目標という言い方、心定めという言い方、いろいろな言い方をされておられます。だけれども、結果を出さなければならぬ。とにかく結果にこだわらなければいかん。特に年祭活動、仕切りの活動ということに関しては、結果にこだわることとは非常に大事なことです。結果にこだわらなければ、三年を仕切る力が普段とは違う力がなかなか湧いてこないのです。三年千日の目標や心定めをとにかく完遂しようということを何度も何度も教会へ申して参りました。そのことをこれまで以上に、ここ数年以上に意識してくださっているからこそ今年の成果だと思っております。ですので、そのところ、これは学生さんたちであろうが、教会長であろうが、神様と相對する時の決心というものとは変わりませんので、一万人は学生担当委員会の心定めではないと私は思っております。学生さんたちの心定めなのだと目標なのだと思いますから、なんとしても達成してもらいたい。九千九百九十九人集まった喜びと一万人超えて集まった時の喜びのその違いは容易に想像のつくところであります。是非、その違いを

味わって当日の喜びにしていきたいということを強く念じる
ところがあります。

そのためには、ただ人を集めるというだけではなくて、何のために一万ということを設定しているのだと、何のために目標を設定しているのだと、一万人が集まってしまうのだと。別に一万人で一斉の行事をするわけではないと思います。集まるだけなのです。一万人が集まってどうするのだと。この百三十年祭という仕切りの時にそれを実現して教祖に喜んでいただくのです。教祖に褒めていただくのです。教祖に「よくやったな」と仰せいただけることが自分の喜びになると、学生さんたちにも知っていただきたいと思えます。そのためには、誘った人が来てくれたとかそういうことも大事ですけれども、しかしやっぱり教祖の元に集まるということ。そして、教祖から日々頂戴するご恩。親神様、教祖から私たちが、学生さんたち自身が普段頂戴しているご恩、ご守護に対してご恩を感じて、そしてみなでお礼を申し上げるのだということを一万人を集める原動力にしていきたいと思うのです。教祖に頂戴しているご守護というのと自分が感じるご恩というのは全然意味が違うことだと思いますので、もちろんご守護があつてこそのご恩なのですけれども、ご恩を是非教えてあげていただきたいと思えます。そして、そのためにその数字を実現するための実動、これは苦勞しなければなりません。その部分は学生

さんたちはむしろ厭わずに頑張ってくれると思いますが、並大抵な苦勞ではないかな。十年前の人も苦勞したのです。二十年前の人も精一杯の苦勞をしたのです。それは今、学生会活動をやっている人とどっちが苦勞したかというのはそれはわかりません。同じくらい頑張っているのだと思います。だけど足りなかったのです。それ以上のことをしなければいけないのです。そういうことを、やはり重々ご承知の上で声かけをしてくださっているところだと思えますけれども、そういう苦勞を「しんど」をしなければならぬ。しんどいことを自らしなければならぬ。何故しんどいことをしなければならぬのか。教祖に喜んでいただくためです。教祖のご恩に報いさせていただくために、今の自分たちができることは何かということが一番分かります。よくしてくれているがこの一万人のおちば帰りだと思えますので、そのところをしっかりと是非お伝えいただきたいということをお願いしたいと思います。

真柱様が、振り返ると百二十年祭をつとめ終えた後、「非常時の動きを常時の動きに、平常時の動きに繋げていくことが大事だ」と仰いました。それは三年千日頑張り続けていたその頑張り方をずっと続けろということではなくて、私はその三年千日にお見せいただいた成果を定着させるということ。普段の教会の力に、あるいは一人ひとりの信仰の力に定着させていくということが大事

なことだとそういうことを仰るのだと思いますので、そういうことを含めて思案をいたしましたも、やはりこの三月二十八日に学生さんたちが集まって、そしてその勢いが学生会活動の次場面に活きていくならば、このお言葉をそのまま実践してくれることに繋がると思いますので、そういう意味でも非常な的を射た活動だと思わせていただきます。三月ですのでまだ数ヶ月ありますが、しっかりとご丹精をいただきたいと思います。

先ほど縦の伝道ということを申しましたが、縦の伝道につきましては、全教としてももう少し、力を入れなければならないと思っております。少年会がもうそろそろ五十周年を迎えます。縦の伝道は少年会がするものだと思っておられる方は結構少なくないように思います。そんなことはないと思います。少年会という役割はやっぱり少年会活動の充実であって、つまり少年会に来てくれる子どもたちに対して、いかに活動をもつて伝道を施していくことができるか。丹精ができるかということ。そして、親たちに少年会に来てくださいということをお願いに回することもいたします。そして来てくれた子どもに対して少年会活動はありえるわけです。親が行かさなければその子どもには少年会との接点はないのです。だから、縦の伝道ということは少年会がすることだという理屈はとも通らない話だと思えます。縦の伝道の責任はどこまでも親であります。いろんな個々の事情がある場合は

もちろんありますが、根本的にはそういうことだと思うのです。

縦の伝道ということは親がしなければ、先ほど申しましたように親の信仰を子どもに伝えるということもできません。周囲もそれに対して助言はできます。後ろからちよつと押したり、段取りすることはできるけれども、やはり親がしなければならぬことなのだ、親の責任なのだと思います。親がもつともつと縦の伝道という意識を持つて、また認識を深めてそれぞれが責任を持つて、兄弟の誰か一人が継いでくれたら良いのではなくて、全員道の子に育つてくれるようにと思つて、結果はともかくそう思つて一生懸命やつていこうという親の意識がやつぱり第一だと思います。それがなければ、いくら手段を講じたつて机上の空論にしかならないということになります。縦の伝道は今の道の上では重要なテーマであります。私たちは陽氣ぐらしを実現する、陽氣ぐらし世界を建設するというのが私たちの究極の目標ですから、私たちが生きている間にそれが実現するなら縦の伝道をしなくてもいいかもしれません。だけどそれは百パーセントないと思いますので、私たちはこの教えを繋いでいかなければならない。でなければ、私たちここにいる人たちがみんな出直せば、またお道は一からゼロからやり直さなければならない。その度にそういう理屈になりますから、やつぱり縦に繋いでいくということが大切なわけです。私たちの教え、つまり陽氣ぐらしの教え、あるいはそれに向

かうたすけ、一条の教え、そして先ほど申しました「恩報」の教え、そしていんねん果たしの道、そういうことを思いましてもやはり縦の伝道がなければ、親から子へ代々繋がっていかねければ為し得ないと思うのです。家制度とか云々ということは「家なんて古い」といろいろ言う人もいるけれども、家が古くたつていいのです。親子はあるわけですから。親から子へしっかりと繋がっていくということが、私たちが親神様の教えに則って道を進めていく上での大前提、第一大命題だということ言い方をすれば、その縦の伝道の大切さが分かります。そのくらいの強い意識を私たちの中に定着させていかなければならないと思います。そういう上からも、今皆さんたちが相対している学生さんたちに信仰を伝えていくということは将来に向けても本当に大事なことだと思います。入信は早ければ早い方がいいのです。きっかけは信仰のある親に生んでもらったと、その親のもとに生まれてきたとそれだけできっかけは頂戴しているのです。あとは自覚だけです。入信の自覚です。それを思えば早ければ早い方がいいのです。十五歳を境にして早ければ早い方がいいと思う。しっかりとそれを自覚できる子どもさんたちが、あるいは若者たちが増えてくること、道の将来に花を添えていくことになっていくと思います。少し厳しい表現もいたしましたけれども、厳しいこと無しに喜びはないのですから、しっかりとこの仕切りの時を通らせていた

だきたい。学生さんたちにとれば、その三月二十八日が仕切りの目標なのでしょう。そこに喜びを見せていただけるためには、今頑張りを続けるしかありません。同じように私たちも年祭活動としてあと二ヶ月。まず自分自身がしっかりと最後までつとめきつて、そしてその上で一月二十六日の感激を感じさせていただければ、何より私たちが勇ませていただくことであります。どうぞ、学担という立場だけではなく、皆さんがお持ちのいろいろな立場の上に、今申しましたようなことを少し参考にしていただければありがたいと思います。是非「オール天理」を実現して、そして真に一手一つの姿があらこちらに見えてくるような、そんな姿を親神様、教祖にご覧いただきたいというふうにも思います。皆さん方のますますのご活躍を大いに期待をいたします。どうか勇んでおつとめいただきたいということを最後にお願いを申し上げます。まして、終わりにさせていただきます。どうぞよろしくお願いをいたします。ありがとうございました。

(文責 吉川万寿彦)



立教百七十八年 学生担当者大会における吉川委員長挨拶 十一月二十五日・第二食堂

本日はお足元の悪い中、学生担当者大会に大勢お集まりいただきまして誠にありがとうございます。只今は、表統領先生より「オール天理」。私たちも「オール天理」をしっかりと意識してつとめさせていたきたいと思います。「オール天理」を考えるには、私たち学生担当者

としての立場が非常に重要だと思います。こどもおちばがえり参加経験者に何とかもう一度学生のおちばがえりに帰ってもらう。少年ひのきしん隊経験者、また、信者さんのお孫さん、外孫さんたち、その身内の方々、おそらくこどもおちばがえりには参加したことがあると思うのです。もう一度学生のおちばがえりに帰ってもらえるように。そして、私たちはその学生たちにおちばの喜びを伝え、共に成人の道を歩んでいき、青年会、婦人会へと繋げていくように。更には教会になくてはならないよう、よくに繋がってもらえるように丹精させていただきたいと思えます。重要な繋ぎの役をさせてもらっております。また、私たち自身が親の立場として、縦の伝道を意識して子どもた

ちに伝えていけるようにつとめさせていただきます。と思います。さて、秋季大祭で真柱様より「教祖年祭の節目は、さらなる前進のための足場、スタートラインであります」とお聞かせいただきました。まずは、お互い年祭に向けて全力を尽くして、残り二ヶ月をつとめらせていただきたいと思います。そして、同時に次なる塚へ向けてのスタートとなる三月二十八日「教祖百三十年祭 学生おちばがえり大会」です。大きな第一歩が踏み出せるよう、全教会からの参加を目指し、何としても一万人の参加を実現させようではありませんか。表統領先生より本当にありがたいお言葉をいただきました。必死になって何としても一万人を実現させたいと思います。み

なさんどうですか。大会に向けて準備なされている中で、必ず出てくるのが「十年前どうやったかな」と。私も、「十年前はなあ。もうちょっとで一人やったんや」ジワジワジワ、プレッシャーをかけられます。十年前の当時の副委員長さんに。ここだけの話、N浦副委員長さんに（笑）。内緒の話です。「学生に甘いんちゃうかー！」と。でも、何とか九千二百五十人と一人の違いを見せつきたいなど。「とにかくやるだけの事はやった。悔いのないようにつとめ切った」と言えるように何が何でも達成させましょう。

一万人と言ってもピンと来ないと思います。でも、それぞれに出された目標人数を何としても達成させてもらいたいと思います。各教区・直属にお渡しした名簿を大いに活用してください。名簿に載っているということは、何らかの行事

に参加したことがある学生たちです。何度も声をかけていただき、学修でも大体一割はドタキャンがありますので、三月になってからも確認をしていたきたいと思います。学生への声かけは、三回までが連絡、四回目からが丹精であると五月に西浦担当常話先生よりお教えいただきました。私たちの真実が大切だと思えます。学生が声をかける方が参加しやすいとは思いますが、でも、先生方が声をかけてくださると親御さんが安心します。私たちの役割は非常に大きいと思います。特に、委員という立場の先生方がどれだけ本気になってくださるか。また、本気になってくださる方、ムシになってくださる委員の先生がそれぞれ教区・直属に何人いらっしゃるか。学生はよく見ておられます。「あの先生は口だけや」とか「あの先生は口うるさいけど学生連れて来るで」など。正直、私も学生時代、申し訳ない

ことです。偉そうに言っていたことがあります。別に学生に良い評価をしてもらうというわけではありません。これは闘いだと思っています。自分との闘い、自分との勝負だと思っています。そして、大会動員が最後ではなく、大会がスタートで、それから先が本格的な丹精になっていくと思います。

三代真柱様は、「時代を担う若い人たちを育てるということは、に、を、い、が、け、おた、す、け、だと思わんす。に、を、い、が、け、おた、す、け、の心でやらなければ、できないと思わんす」とお仕込みくださいました。おた、す、け、について、私の劇的なお話を聞いたいただきたいと思っています。十数年前の話ですが、私の知り合いから相談を受けたのです。修養科で出会った友達、女の子ですが脳腫瘍になったとのこと。彼女は学生ではありませんでしたが学生層の年齢でした。初代の子なのですが、

教会とは切れていました。相談を受け、一緒に彼女の入院する病院までお見舞いに向かいました。最初は卑屈な顔をしていたので、どう声をかけていいのか悩みました。徐々に話をしてくれるようになり、少しずつ少しずつ顔が変わっていきました。帰る前におさ、づ、けを取り次ぐことができ、涙を流して喜んでくれたのです。それから一変して、病院から毎日電話をしてくれるようになりました。「吉川さん、今日ひのきしんしたよ。スリッパ揃えたよ」また、「今日はかしもの・かりものの勉強したよ」と、とても明るく話してくれました。そして、CTの検査を行うという検査の前日に、再びおさ、づ、けを取り次ぎに行きました。行く前日の夜です。私はガラスコップを一度に三つ持ち運ぼうとして割ってしまい、その破片が手のひらに刺さり怪我をしてしまいました。血がとめどなく流れてきたのです。「ど

うしよう。困ったな」と、セロテープでグルグル巻きにして一生懸命血を止めたのです。ところが翌朝、痛みで指が動かなくなっていました。すぐ、救急で病院に行き、縫ってもらい、包帯を巻いたままおさ、づ、けを取り次ぎに向かいました。到着しますと、彼女の病室には入院が長期になることが予測されてか着替えが山積みになっていました。おさ、づ、けを取り次ぐ前にふと（彼女がよ、う、ぼ、くである事を思い出し）「まず私の右手におさ、づ、けして」とお願いをしました。彼女は緊張しながら一生懸命取り次いでくれたのです。「ありがとう。おさ、づ、け取り次ぎに来た者が反対におさ、づ、け取り次いでもらったなあ」と笑いながら「じゃ次に私が取り次がせてもらうね」と言つて、（洗面所に）手を清めに行つたところビビリと電気が走りまして、指が動くようになったのです。「動いたよ！ 動いたよ！」彼女

は大泣きです。ここではじめて「もう大丈夫だよ」と声をかけることができました。おさ、づ、けを取り次ぎ、数日後、検査の結果が出ました。腫瘍がすっかり消えていたのです。すぐに退院することができたのです。見事なご守護をいただきました。良い話でしょうか？ ……別に良い話をしようと思つたわけではないのです。綺麗な話をしようなど思っていない。この後が重要なのです。一ヶ月も経たなかつたと思います。彼女から私に贈り物が届きました。何かなと思ひ開けてみましたら、どこかの、あまり聞いたこともない新興宗教のパンフレットだったのです。手紙には「吉川さん。良い教えますよ。まだ天理教信仰しているのですか？ 天理教信仰している場合じゃないですよ」と。びっくりしました。ガクとききました。それから反対に何度も何度も私が勧誘されるようになったのです。未だ解決でき

ておりません。彼女が新興宗教に入ってから、私自身がだんだんと距離をおくようになり、連絡しなくなりました。今は連絡が途絶えている状態です。それでも心がずっとずっとモヤモヤしていました。論達第三号に「おたすけは周囲に心を配ることから始まる」とあります。私自身改めて、いろいろと思案させてもらいました。彼女に心を配りました。本人が勇んでもらえるよう、また、本音で話してくれる心がけました。「身上・事情に苦しむ人、病む人があれば、先ずは、その治まりを願い、進んで声を掛け、たすけの手を差し伸べよう」。もちろんお願いもしました。元氣を出してもらえよう声かけをして、じっくり話も聞かせてもらい励ましていました。「病む人には真実込めておさづけを取り次ぎ」、おさづけも取り次がせていただきました。「悩める人の胸の内に耳を傾け、寄り添うと

ともに、を、やの声を伝え、心の向きが変わるようにと導く」。教えを少しずつ伝え、ひのきしんに励んでもらうよう、話もしました。また、彼女も一生懸命実践をしていていました。ここまではさせてもらっていたと思います。次なのです。「更には、共に人だすけに向かうまでに丹精したい」ここが完全に抜けていたのです。そう考えた時、もう一度遡ってみますと「を、やの声を伝え」、何を伝えていたのか。どのように「心の向きが変わるように」と導いていたのか。天理教は結果じゃない。病氣が治ること、事情が治まることが最終目的ではない。わかっているんですけど、本当に真剣に彼女と向き合っていたのか。ご守護いただいてからが本当のおたすけじゃなかったのか。真柱様は「私たちの道は人が人をたすける道ではありません。たすけの主は親神様、教祖であります。（中略）あの人に育ってほしいと思うならば、

そのような御守護を頂けるように心を尽くすことが肝心であります」（創立三十周年担当者大会）と仰せ下さっています。まずは、おちばがえりだろうと。一番大切なおちばがえりの旬を私は逃してしまっただけです。そして、今生きていることがありがたい。今生きている喜び、そしてご恩報じを伝えずにいたのです。それなのに私の心の奥底には、「ここまで真実込めておさづけを取り次いだのに。ここまでご守護いただいたのに何で」と。「どう思っているのだ」と彼女を責めたくないような自分がいたのです。本当に恥ずかしい限りです。大切なことを伝えずに自然と私自身が彼女から離れてしまっていたのです。「論達」を通しておたすけの本質を改めて確認し、私自身の姿を見つめる機会をいただきました。只今、表統領先生も仰せくださったように自分自身の信仰の喜び、今生きている、ご守護

いただいているご恩。大切なご恩報じを伝えられずにいたのです。

最近の学生は素直で真面目だと言われるたりします。ある大学生と話をしておりまして、ちょっと物事を斜に見ているような顔をしていたので、「高校時代よく幹事さんと喧嘩したろう」と聞きました。すると彼は言いました「反抗したらね、倍ほど言われるからはい言うときますねん」と言っていました。なるほどと思いました。こちらが伝えた気になって自己満足していることがあるのだ。そんなことって大いにあるなあと思いました。

現在、天理教学生会は大きな節をいただいております。実行委員長が変わるかもしれませんが。来期の委員長もまだ決まっています。入信の元一日、信仰の元一日、これも私は伝えきれないでいたのだと思います。学生会活動に関してはお互いいろいろな話し合いができていたと

しても、果たして信仰の元一日の話、また、自分自身の信仰の喜び、ご恩報じに対して正面から向き合って話をしていたのであろうか。いろいろと反省させられることばかりです。学生たちは現在、連日のように話し合いを進めております。

みなさん。お手元のバッジをご覧ください。学生の手作りなのです。学生が私のところに来まして、「いろいろとご迷惑をおかけしております。すみません。このバッジを担当者大会で先生方にお渡しください。今、天理教学生会は一手一つになれていません。なかなか一つにまとまりません。でも、大会に対する思いは今も変わりません」と。このバッジは、一つ一つ紙を切って一つ一つプレスして作成するのです。これを千回行い、千個持つてきました。学生の真実が込められたバッジであります。学生の思いに私たちも応えさせてもらい、共につとめさ

せてもらいたいと思います。昨年の学生担当者大会で真柱様は、「彼らが、親神様の思召に則した考え方で過ごし、教祖のひながたを目標に成人への道を地道に歩み続けることができるように、そこに焦点を合わせて、焦らずに彼らを丹精していつてほしいと思うのであります」とお言葉を下さいました。学生たちは今悩んでいます。苦しんでいます。立ち止まったりもします。でも、前だけは向いております。それぞれ各教区でも直属でも学生たちは一生懸命頑張っています。一万人動員というプレッシャーは非常に大きく学生にとって大きな重圧だと思っています。真柱様は「彼らが、成ってくる姿の中に喜びを見つけて、信仰的な思案で心明るく対応できる人に育つよう、学生たちを見守り、成人の方向へ導いてほしいと思うのであります」と仰せくださっています。私、今年の六月二十六日に同級生のと

ある直属の会長さんに言われました。「同級生である俺しか言えへんと思うからほつきり言うけどな、一万人一万人って言うけどおまえは何人連れて来るんや」と言われました。恥ずかしながら答えられませんでした。情けないと思いました。

まず、委員長という立場としては、とにかく**おぢばに残つて**(部活動などをして)いる管内の学生さんたち全員に式典に参加してもらえるよう全力を尽くすつもりです。私自身が出来る声かけをして、何としても参加を促そうと思っております。

そして、私個人としては何とか新規の学生さん、未信者の学生さんをい**がけ**して、参加してもらう事を実現させます。

これだけしか言えなくて申し訳ないです。現実的には難しいですが、勤務以外の時間で何とか一人に声をかけ、ピンポンできるような努力しているのですが、まだまだ甘いのです。でも、もっともっと自分

自身に勝負していかなあかなとけつを叩いているような次第でございます。先ほども言いましたが、闘いです。自分との闘いです。

今この旬に、各自が教祖にお与えいた
だいたそれぞれの立場をしつかりとつと
めさせてもらい、お互い目標人数を何と
してでも完遂させ、そして、合計で一萬
人到達できるよう、皆それぞれ一人ひと
りが本気になってつとめさせていただき
ましょう。そして、表統領先生が仰せく
ださったようにそのつとめきつた真実の
姿を教祖にお喜びいただけるように、と
にかく必死になってつとめきらせていた
だきたいと思います。本日はお忙しい中
お集まりいただきまして、本当にありが
とうございました。今日、お聞かせてい
ただきました表統領先生のお話をしつか
りと心に治め、「オール天理」で年祭に
向けて、そして大会に向けて、更には大

会後の丹精に向けて共に成人の道を歩
ませていただきたいと思います。どうぞ
よろしくお願いいたします。ありがと
うございました。

教区・直属担当者
パネルディスカッション

委員長挨拶の後、「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会」に向けての意識を高めることを目的に、和田与志男先生（北海道教区）、後藤廣信先生（愛知教区）、丸川博志先生（双名島大教会）、清水成孝先生（鹿島大教会）の四名をパネラーに、福江委員司会のもとパネルディスカッションを行いました。

まずは大会に向けての動員活動から話題は始まり、和田先生は、北海道教区として参加者千名の動員目標を掲げるに至った経緯を話した後、支部巡回を行う中で、学生から「ある教会では、会長さんがわざわざ教服に着替えて巡回を受けてくださった。その後、『お礼に神様のお話をお取り次ぎさせていただきました』と、八つのほこりの話を諄々と説いてくださった」と、感激の報告を受けたエピソードを紹介しました。続いて、後藤先生は、いかに学担と学生とが意思の疎通を図っているかを紹介した後、ある教会から「雨の中、熱心に教会回りをしている学

生を見て感動しました。是非うちの息子を行かせますので、よろしくお願いします」という電話がかかってきたことなど、学生が動員に励む姿に心を打たれた方の声を紹介しました。

次に、清水先生は、直属の学生会が無いという現状を説明した上で、この大会に向けては、教区参加、直属参加を問わず鹿島として動員目標百二十名を掲げて、学生一人ひとりに大会の参加を促している様子を話しました。特に、大会参加を約束した学生に直筆で署名してもらう紙をスクリーン上で紹介するなど、熱意は会場内の参加者にも伝わりました。丸川先生は、部内への巡回の様子を説明した後、学生会への働きかけ、丹精の仕方について話しました。学生の自主性に委ねながらも、心定めや理作りの大切さが学生に伝わっている様子は、学生担当者として大いに参考になる話でした。

話題は常時活動に移り、後藤先生は、普段の行事前にも学生が熱心に声がけに回る姿を紹介

しました。その中でいくつもの「不思議」を見せていただいた話には、自然と熱がこもっていました。また、和田先生は、学生層育成に長年携わる中で、自身の苦しかった経験も踏まえながら、声をかけ続けることの大切さを訴えました。

更に、丸川先生は、お道の教えの素晴らしさをいかに学生に感じ取ってもらうかという視点を持ちながら、学生会行事を企画していること、そして学生が卒業してからもお道に繋がるよう、仕込み・伏せ込みの行事を必ず組み込んでいることを、そして清水先生は、青年会・婦人会との連携、更に教区直属の垣根を越えて、学生層の育成に力を合わせている様子を具体例を挙げながら話しました。

最後に、「教祖百三十年祭 学生おちばがえり大会」に向けての思いや、学生担当委員会の御用に携わる上でのモットーを一人ひとりに発表していただいてパネルディスカッションを終え、会場の参加者全員が「教祖百三十年祭 学生おちばがえり大会」への動員目標一万人の達成を改めて誓い合いました。

立教179年 学生担当委員会 行事計画

月	学生担当委員会行事	配布資料
1	おせち学生ひのきしん隊 直前研修会(4) おせち学生ひのきしん隊(4～7) ※1月例会はありません	教区年間活動計画書 「教区・直属HARP講習会」開催要項・開催願・報告書 「まなびば」開催のてびき・実施要項・チラシ 「まなびば」実施会場予定表 「まなびば」実施計画書・実施報告書 「まなびば」教区事前研修会実施計画書・実施報告書
2	学生生徒修養会 大学の部 スタッフ事前研修会(1～3) 学生生徒修養会 高校卒業生コース スタッフ事前研修会(2～3) 例会(25) 〈屋内〉まなびば研修会(26～27)	「学生生徒修養会 高校の部」係員依頼 「教祖130年祭 学生おちばがえり大会」引率のしおり 「まなびば担当者研修会」要項
3	※Happist新規購読推進月間 学生生徒修養会 大学の部 スタッフ直前研修会(1～3) 学生生徒修養会 大学の部(3～9) 学生生徒修養会 高校卒業生コース スタッフ直前研修会(5) 学生生徒修養会 高校卒業生コース (6～8) 例会(25) 教祖130年祭 学生おちばがえり大会(28)	「直属担当者懇談会」要項 「教区・直属合同懇親会」要項 「学生生徒修養会 高校の部」チラシ・要項・受講願書 〈屋外〉まなびば研修会要項
4	例会(25) まなびば担当者研修会(26)	学生名簿の交付について 「学生会総会」開催届・祝辞下附願・報告書
5	直属担当者懇談会(25) 例会(25) 教区・直属合同懇親会(25) 学生生徒修養会 高校の部 準備会議(26) 〈屋外〉まなびば研修会(27～28)	「こどもおちばがえり学生ひのきしん隊」募集要項 「道の学生ひのきしんDAY」開催要項
6	例会(25) 学生生徒修養会 高校の部 スタッフ事前研修会(27～28)	「教区委員長懇談会」要項
7	例会(25) こどもおちばがえり学生ひのきしん隊(25～8/6)	
8	学生生徒修養会 高校の部 スタッフ直前研修会(7～9) 学生生徒修養会 高校の部(9～15) 教区委員長懇談会(25) 例会(25)	
9	道の学生ひのきしんDAY 例会(25)	「学生担当者大会」ご案内・参加票 「学生層育成者講習会」開催要項・委員派遣願・報告書 「HARP研修会」要項 「学生生徒修養会 大学の部」係員依頼 「学生生徒修養会 高校卒業生コース」係員依頼
10	例会(25)	「立教180年 春の学生おちばがえり」チラシ 「おせち学生ひのきしん隊」募集要項・参加申込書 「学生生徒修養会 高校卒業生コース」チラシ・要項・受講願書
11	学生担当者大会(25) HARP研修会(27～29)	「学生生徒修養会 大学の部」チラシ・要項・受講願書 「立教180年 春の学生おちばがえり」動員パック
12	例会(25)	直属学生担当委員会活動報告書 〈屋内〉まなびば研修会

学生担当者大会を

終えての意気込み

福島教区学生担当委員長 杉澤元和

牛込大教会学生担当委員長 小川正典

○福島教区学生担当委員長 杉澤元和

十二月教区委員例会で、今回の学生担当者大会のふりかえりをしたところ、それぞれの委員からこの旬に親の思いに添わせていただき、共々に成人させていただきたいという思いが感じられました。と同時に、私自身の学生会活動への意識や取り組みが甘かったことに気付かれました。大会一万人を目指すのは学生会であって、我が事として捉えず、ずっと学生のフォロー役としてだけの気持ちでつとめていたように思います。それ故に、ある方から吉川委員長が言われた「君は何人の学生をお連れするのか？」との一言が、私に対する言葉として胸に突き刺さり、今までの担当委員長としてのあり方を反省しました。今、私たちが学生と一緒に本気になつて取り組まねば、福島の動員目標数ですら達成できないでしょう。

では、どうしたら良いかを委員と練り合いました。「縦の伝道が弱いと感じられる教会があるならば、学生会を利用していただけるように

取り組んでいったら良いのではないか」、「親からの信仰が自分のものとなる元一日は、別席のお誓いの時ではないか」「ならば、大会の時に私たちが学生に積極的に別席を勧めて、本当のようばくとなるよう丹精に努めよう」。また、パネルディスカッションに出られた教区に倣い、「福島からの便を増やして、短期日程でも参加しやすいようにしてみよう」との声や、親里で学ぶ学生には集いを開いて、大会への参加を促すなど、具体的な話が出て、早速取りかかることにしました。

今回の担当者大会で学んだことを活かして、喜びの年祭を迎え、楽しみな学生おちばがえり大会にさせていただきます。

○牛込大教会学生担当委員長 小川正典

私は、先日の学生担当者大会に委員八名と共に出席し、表統領先生をはじめ諸先生方の学生おちばがえり大会参加者一人に向けての本気のお気持ちを受け、改めて気合を入れ直しました。

当学担では例年の倍、八十名の心定めをさせていただき、その完遂に向けて、大会動員名簿に加え、各管内教会に学生名簿の提出をお願いし、それをもとに呼びかけます。また、大会ポスターを作成し、大教会、詰所、全部内教会に掲示。PR活動として、部内教会長様方の意識の高揚を図るために、毎月の祭典日に学修DVDを各モニターに映しております。学生の意識向上には、「冬の集い」等の学生との練り合いの場を作り、学生スタッフの増員をと考えます。

管内学生への働き掛けとして、毎年「おちば学生の集い」をおちばにて開催し、東京より学生を連れ、管内の学生との交流を深めています。今年は、日程の都合で、前夜祭には模擬店の出店をしますが、その分、直属アワーに力点を置くことを重要と考えます。

しかし、育成の現実理想通りには運びません。丹精の難しさを痛感します。この道を日々通らせていただく中で、私達は知っています、どうすれば教祖は喜んでくださるかを。そして、当日の学生達の姿を通して感じるのです。そう、共に歩む仲間であることを。委員一同、コツコツ邁進します。

立教百七十八年 HARP研修会 開催報告

十一月二十六日から二十八日の三日間、本部第十二母屋および、七・八・九母屋を会場に「HARP研修会」を開催しました。今回は新たに「育成行事支援コース」を設け、百十四名の受講者が、四つのコースに分かれて、HARPについて理解を深めることのできた大変充実した研修会となりました。

今年も教区・直属からの受講に加え、韓国・ハワイといった海外からの受講もありました。さらに、第十三期学生担当委員会の本部スタッフや、来春開催の「学生生徒修養会大学の部」の係員を初めて務める方も受講しました。各コースともエクササイズの実習や説明に加えて、HARPや学生層育成についての講義が行われ、HARPについて理解を深めるだけでなく、育成者としての姿勢を改めて学ぶ機会となりました。

【コース説明&コース受講者感想】

■育成行事支援コース

新設の育成行事支援コースでは、プログラムの体験を通して、各種育成行事の企画、立案への意識を高めることをねらいとし、エクササイズの体験、講話、プログラム構成を学び、ウォーミングアップの体験及び実践を行いました。

【受講者感想】

HARP体験を通して純粋に楽しむことができ、そしてその後の解説や委員長の講義を聞かせていただき、プログラムの構成や学生層育成の心構えなど大切なことを学べました。また、育成行事を通して、学生会や青年会、女子青年の活動へと繋がっていくのだと感じ、非常に有意義な研修会でした。

■HARP体験コース

HARP体験コースでは、HARPの有効性

を体感してもらうことをねらいとし、エクササイズの体験、HARPや学生層育成についての講義を行いました。

【受講者感想】

学生層が楽しむプログラムだと思っていましたが、大人でも楽しめることを実感しました。HARPを活用することで、こんなに人との距離が近くなるとは驚いています。また、HARPの相互作用のすごさを感じました。

■HARPトレーナーコース

HARPトレーナーコースでは、各エクササイズの進め方やトレーナーの姿勢について学び、希望者には実際にトレーナーの経験をしてもらうなど、実践的な研修となりました。

【受講者感想】

トレーナーがいかにか心を使うものかということとを学んだ。また、頭で描くだけでなく、自分がトレーナーを実際に経験し、トレーナー経験者からの意見も聞けて良い経験になった。

青空

以前学修大学の部に参加した学生の話。遠い親戚の子で、突然「大学を休学しようかと思う」と相談を受けた。おちばに一回も帰ったことのない子だったが、ダメ元で学修大学の部にお誘いした。親御さんにも必死にお願いをし、承諾を得て受講してくれることとなった。誘ったものの、参拝の仕方も、おつとめも分からず嫌な思いだけして帰ることにはならないかと、ネガティブな考えしか出てこなかった。しかし、期間中、みんなと同じように過ごしてくれた。路傍講演も堂々とつとめてくれた。その期間、スタッフとして務めていた私もとても嬉しく、親神様・教祖の大きな親心にありがたい気持ちでいっぱいになった。

教祖のお膝元で育ていただいたその学生を含め、これまで私が携わった学生達の多くが、ソーシャルネットワークキングサービス(SNS)を通して、今はおちばへ誘う側として教祖百三十年祭年祭活動をそれぞれに一生懸命つとめている。この時句、ちよつと先行く道の先輩として気を抜くわけにはいかない。年祭に、大会に向けて、私の住む所は雪空だが、晴天の心で一人でも多くの方におちばへ帰っていただけるよう声掛け、心がけに努めたい。

元人材育成部部員 佐々幸雄

立教179年 〈屋内〉まなびば研修会のご案内

平素は、高校生の集い「まなびば」開催の上にご尽力いただき、誠にありがとうございます。

この度「まなびば」の活性化、また学生層育成を担う人材づくりの上に、〈屋内〉まなびば研修会を開催いたします。まなびば担当者はもちろん、まなびばスタッフも是非ともご受講ください。

記

- 【日時】 立教179年2月26日（金）～27日（土）
集合・受付 … 2月26日 13:30
解散 … 2月27日 15:30
- 【会場】 本部第12母屋（駐車場は北2駐車場をご利用ください）
- 【対象】 ・まなびば担当者
・まなびばスタッフ（各教区まなびば担当者を除く3名まで受講可）
- 【内容】 〈屋内〉まなびばの体験、進め方説明
- 【受講費】 2,000円 ※まなびば担当者は免除
- 【携行品】 ハッピー、保険証、筆記用具、雨具、その他宿泊に必要なもの
※女性はズボン着用でご集合ください。
- 【申し込み】 申込用紙に必要事項を記入の上、受講費を添えて学生担当委員会事務局にお申し込みください。
- 【申込締切】 立教179年2月13日（土）
- 【問い合わせ】 天理教学生担当委員会事務局
Tel 0743-36-2489（直通） 内線 5817

立教179年 学生生徒修養会 大学の部

募集要項

- ▽ 期 間 … 平成28年3月3日(木)～3月9日(水)
- ▽ 受講資格 … ①平成28年1月8日現在、大学・短期大学・大学院・専門学校・高等専門学校（4年生以上）に在学している者。
②全期間を通して受講できる者。
- ▽ 募集人員 … 700名（男子350名、女子350名）
- ▽ 内 容 … 講義、グループワーク、にをいがけ、ひのきしん、修練（おつとめ勉強）など。期間中に別席を1席運べる日を設けます。
- ▽ 集 合 … 3月3日正午から12時30分までに指定された宿舎に集合してください。
- ▽ 解 散 … 3月9日 午前10時頃、各宿舎にて
- ▽ 受講御供 … 8,000円 所属する詰所（直属学生担当委員会）に納めてください。

申し込み方法

- ▽ 申込方法 … 下記の書類を整え、最上級教会長の署名・捺印をいただいた後、学生担当委員会事務局に申し込んでください。
・受講願書1通 ※特に学年の記入間違いのないようお願いいたします。
・返信用封筒1枚（住所、氏名、郵便番号を記入し、82円切手を貼付してください）
- ▽ 受付期間 … 平成28年1月8日～2月25日
(事務処理の関係上、願書はなるべく2月15日までに提出してください)
※受講にあたっての詳細及び必要事項は、書面にて2月15日以降、随時本人に郵送いたします。また、2月15日以降はTSAwebsiteでも確認できますのでご利用ください。
※受講願書は学生担当委員会、各教務支庁にあります。

問い合わせ先

天理市守目堂町213-4 おやさとかた真南棟3階 学生担当委員会事務局
《郵便》〒632-8790 天理郵便局私書箱1号
《電話》0743-63-2489（学生担当委員会事務局直通）/ FAX 0743-62-5780

主催・・・天理教教会本部 事務局・・・天理教学生担当委員会

立教179年おせち学生ひのきしん隊宿舎について

来年開催するおせち学生ひのきしん隊では、期間中の宿舎が本部第12母屋と本部第38母屋に分かれます。それぞれの宿舎割りとは下記の通りとなります。昨年より変更点がありますので、必ずご確認ください。尚、直属申込の高校生につきましては、出身教区別に割り振ります。

期間中の問い合わせにつきましては、各母屋の内線番号を掲載いたしましたので、そちらまでご連絡ください。

■38母屋宿泊教区（高校生）・・・内線（4520/4523）

茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄

■12母屋宿泊教区（高校生）・・・内線（4178/4179）

北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島・新潟・富山・石川・福井・鳥取・島根・岡山・広島・山口・徳島・香川・愛媛・高知

※大阪教区は、12母屋・38母屋に分かれます。

参加者への発送物には、それぞれの宿舎を明記しております。

Happist2月号 予告

[特集] 学校が教えてくれたこと

※内容は一部変更になる場合があります。

連載

・教理コーナー

希望の灯～おやさまのひながたに学ぶ～ 平野 知三（本部准員）

・輝く生き方見つけよう

Key Person お笑い理学療法士 日向亭 葵

・信仰エッセー

明日の地図ひろげて 中森 くによ（名張分教会長夫人）

・人生を彩る1冊をあなたに。

虹色のしおり 三濱 靖和（天理図書館主事）

・東馬場先生と学ぼう！

Happistニュース 東馬場 郁生（天理大学国際学部教授）

明日につながる学生マガジン **Happist 2**

個人宅に直接「Happist」が届く個人購読も行っております。詳細は学生担当委員会事務局までお問い合わせください。